

---

## 編集後記

---

2020年は武漢肺炎ウイルスに翻弄された1年とって過言はないだろう。

このウイルスがどのような経緯で出現し拡散していったのかについては、依然として謎であり、現在共有されていることは、1) 飛沫感染と接触感染で感染する、2) 無症状の場合がある、3) 味覚に異常が表れることがある、4) 致死率は全年齢で平均0.1%~4%程度(ちなみにインフルエンザの致死率0.1%)で、80歳以上では15%と高い、程度だろう。

厚生労働省が「ウイルス性の風邪の一種」と表現するこのウイルスは、人々の往来を停止させ、経済を停止させ、ひいては人々の思考を停止させているようにも思えるが、その是非については後生の人々が判断するだろう。しかし現状の情報収集と情報分析、そして情報公開のあり方については、今、議論し解決していかなければならない問題ではないだろうか。例えば、先に述べた致死率の計算は本当にこのウイルスによって死亡した人を対象にしていたのか? 感染者数とPCR陽性者数とは混同されていないか? 経済を停止させたことによる社会的影響は多面的な指標で調査されたのか? など、問題点を上げると枚挙にいとまがない。

いつの頃からか“現代は情報化社会”という言葉が使用されるようになったが、溢れる情報には偽りの情報が混入されたり、偏向されたり、統制されていたりと、この1年で様々な様相を呈してくれた。それはまるで伝統医学における“真寒假熱”、あるいは“四逆湯”と“四逆散”の症候のようであった。

また「アフター・コロナ」や「Sustainable Development Goals (SDGs: 持続可能な開発目標)」などの耳触りの良い言葉が生まれた1年でもあった。自然との調和の中で生まれ育まれた伝統医学からすると、近代の人間の愚かで驕った行為そのものが問題でありSDGsもその一部なのではないかと、うがった見方をしてしまう。

益々、個々の『心眼』が必要となる。

令和2年12月吉日

日本東洋医学研究会会長 松本 和久

---

日本東洋医学研究会誌 第六巻 2020

編集・発行 日本東洋医学研究会誌 編集委員会  
発行日 令和2年12月21日  
発行者 日本東洋医学研究会

---